

福嶋聡著「コミュニケーションの時代」読む人・書く人・作る人 図書 2015年9月 第799号 岩波書店 2015年9月1日刊を読む

コミュニケーション

1. 現代は、「コミュニケーションの時代」である。
2. ぼくたちは、いつでもどこでも、「コミュニケーション」を強いられ、「コミュニケーション力」を問われる。身近どころか身体に装着されようとしている IT 機器は、ぼくたちにただ素早い応答のみを迫る。熟慮は想定外で、沈思黙考は裏切りである。常に「コミュニケーション」が前提とされる強迫的状况は、実はコミュニケーションの可能性の芽を、摘んでいる。
3. 最初からコミュニケーションできる本に、おそらく読む価値はない。どこかよそよそしい本のページをめくるときにこそ、実りある読書が始まる。一読後、すぐに理解できる必要はない。本は読者の体内深く、沈潜・蓄積する。そしてある時、出来事や他の本との遭遇が触媒となって、閃光が生じる。
4. 時に、そこにあることさえ不快な本が、ぼくたちを鍛える。
5. 見せたくないもの、隠れているものを「見える」ようにする、相手の意思にかかわらず、事実や問題が「目に飛び込んでくる」状態をつくり出す、これが真の「見える化」である。
6. 「見える化」とは「見せる化」であり、「見せよう」という意思と知恵がなければ、実現できない。(遠藤功『見える化』)
7. 何かを訴えたい、伝えたい著者の思いが結晶した本が、読者の心に侵襲する。読者の心は、時にそれに抗いながら、変容し、応答していく。それが真のコミュニケーションである。
8. ぼくは書店人として、「見せる」ための意思と知恵と勇気を持つことを希う。そして、憲法二十一条の「出版の自由」を思う。

[コメント]

ジュンク堂書店の福嶋聡氏の読書論。カバンの中に学校の教科書や仕事の書類以外に、1冊の本を必ず入れ、少しでも時間をつくって、じっくりと読み込み、筆者との時空を超えたコミュニケーションを果たしたい。